法相三卷鈔

張

特 258
985

始

345-48.
特258
985

出相三卷鈔

昭和七年
帝國圖書
丙寅

鈔主勝願院良遍上人。諱は信願、別に行慧又は蓮阿と號す。姓は藤原氏、文治元年京師に生る。宿善冥力に薫じ、幼にして興福寺光明院覺遍僧正の室に入り受戒得度す。僧正は是れ名匠解脱房貞慶上人の上足、二明の探題として深く唯識五重の蘊奥を窮む。鈔主之れが幽丈に侍し螢雪鑽仰その功を積み、具さに因明内明の秘訣を傳領す。加之戒體を大悲菩薩に受け、又禪要を聖一國師に參す。三學圓に備へ、三輪常に淨し。可謂一世の師表なりと。宜なる哉勅を拜して法印權大僧都に任ぜらる。時に法相の宗風甚だ振はず。慨然として之れが挽回を發願する所あり。則ち應理大乘傳通要錄二卷、及び觀心覺夢鈔二卷を撰し、自宗の正意を宣揚し他宗の妄批を慈誨す。立論正々意氣凛凛當るべからざるの概あり。且つ通別二受抄・通受比丘文理抄

等の律に於ける、猷欣抄・善導大意抄・念佛往生決心記の淨土教に於ける、將た又眞心要訣の禪に於ける、卽事而眞抄の密教に於ける如き、唯識本宗の他宗教義に對する交渉を論究するもの。凡そ是の如き一代の著書一百有餘部みな後學の珍敬し措く能はざる所なり。就中本「法相二卷鈔」は、實に是れ母公の入信を勸進せんとし、之を記述し以て膝下に奉呈したるもの。文々句々、一に純眞なる孝道の發露する所なり。拜讀するもの誰れか肅々襟を正さざらん。予曾て古寫抄本數部を得、聊か對校朱點を加ふるものあり。道友奥田文學士一日來り言ふ。我れ年來、古賢の慈父母教化に類するの抄物を編纂し、一は以て古人孝順の美善を表彰し、一は以て今人修養の料に資するあらんとし、之を念願する年已に久し。乞ふ書目を指示せよと。予乃ち指を本書及び覺鑁上人の父母孝養集に屈す。然り而して孝養集は先きに雅契正木直彦先生之を印施する所ありたりき。於茲乎胥議し本「法相二卷鈔」の印行を發願し、相携へ生駒山麓舊大聖竹林寺の遺趾に於ける鈔主上人の墓前に詣拜し、所願の圓成を祈る所ありたり。墓地は上人の老後此に幽棲し、建長四年八月二十八日報齡六十有九、遷化終焉の聖蹟なり。追懷欽慕曷んぞ堪へん。而來奥田君は懇懃印刷校正の事に從ひ、製本將さに成らんとす。予欣雀情禁へず。乃ち一言を卷首に記し、聊か隨喜の微衷を舒すと、云ふ爾り。

昭和七年七月二十六日夏期唯識講座滿了の日

法隆寺貫主　佐伯定胤識

○唯識觀

法相二卷鈔

唯識大意

凡そ我宗の意、法門を立ること義門區々なり。且らく唯識・三性・百法・四緣・四分・種子・五性・作業・受果・五位の修行に付て、形の如く記し申候。

先一切の諸法は皆我心に離れず、大海・江河・須彌・鐵圍、見ず知らぬ他方世界、淨土菩提、乃至一實眞如の妙理まで、皆ながら我心の內にあり。何況、我身の頭目・手足・衣服・飲食等をや。之を心の外に有りと思ふは、迷亂也。此迷亂に依るか故に、無始より以來、生死に輪廻する身となれり。一切諸法は、心に離れずと明かに知ぬれば、生死輪廻永く絕て、無上覺王の位に至らずと云ふことなし。されば誰も皆、心の外に有りと思へる萬物の形は、悉く是れ體性都無の法なり。心を執して實と思ふも又迷亂なり。心を執して心の外に置が故なり。空を執して實と思ふも又迷亂なり。心の外の空の相を見るが故なり。是の故に心の外に有りと覺る相は、色も・心も・

有も・無も皆悉く實の法に非ず。此僻事の形を滅し失せて、不思議の無漏智を發し、內に一心を覺るを、唯識眞實の觀と名く。

○三性

是に五重あり。其第一の遣虛存實唯識と云ふは。此不思議の一心の中に、性あり・相あり、性は卽ち眞如の妙理なり、是を圓成實性と名く。圓滿成就して本來凝然なるが故なり。相は卽ち有爲の諸法なり、是を依他起性と名く。彼の眞如の上に、他の緣に依て假に起れる相なるが故なり。謂ゆる色・聲・香・味・觸、眼・耳・鼻・舌・身、身中の諸の心、及び資具舍宅・田園山林河海等是なり。此假の相を假の相とも悟らずして、定て實に有りと思ふ心の前に當りて、現ずる實有の面影を遍計所執と名く。是法都無の法なり。是れ卽ち前に申候つる、心の外の僻事の形なり。遍く計らひ思ふ迷の心の執する所なるが故に、遍計所執と名く。譬へば、繩を見て蛇と思ふ時に三重の事あり　繩の性は藁なり、藁の上に手足等を緣として假に起れる形なり。其形極て蛇に似たり。之に依て人誤て蛇と思ふことあり。其蛇

遍計所執

の形は、唯ひがめる人の心の上の面影にて、體性都無なり。彼の繩の形は緣より起りて假に有に似たれども、實の體は無し。實の性は藁なり。さればこの蛇の相は、其性ひたすらになし。繩の相は假に有り、藁の體は繩か性として實に有り　圓成の理は其藁の如し。依他の諸法は彼の繩の如し、遍計所執は彼の蛇の如し。

此中に依他の樣を、殊に心に懸て能く思ひをくべき事にて候。世間に有らゆる物の色形・香・味、乃至人の心に至るまでも、皆是れ夢・幻・露・電などのやうに、あだにかりそめなる法なり。あだにかりそめなるべき故は、是の如き諸の物は、併ら自ら有ること能はずして、皆緣を待て生ずる故なり。されば青も青に似たり、實の青には非ず。黃も黃なるに似たり、實の黃なるに非ず。何も皆是の如くなるものを、凡夫の心拙なくて、眞實に有る物ぞと思ふなり。此謬りより事起りて、物もほしく、腹も立ち、慢も起り、疑も有るなり。此理を能々思ひ開きなば、自ら遍計所執の體性なき事も知ら

れ、圓成の理の眞實なることも悟られ、諸の煩惱・惡業もほろび失せんずる事にて候。是を遣虛存實の唯識と名く。

のこりの四重これを略す。今此遍計・依他・圓成の三を、三性の法門とは申候也。

○百法

○二無我

依他九十四法

此三性を委く開けば、百法あり。二無我あり。

百法と云ふは、依他起性には九十四法あり。圓成實性には六種の無爲あり。是を百法と名く。二無我と云ふは、遍計所執の空なる事を云ふに、二あり。一に補特伽羅無我、二に法無我なり。

先づ依他の九十四法と云ふは

心王に八あり。

心所に六の位あり。此六を委く開けば五十一の心所あり。

色法に十一あり。

不相應に二十四あり。合して九十四なり。

○八識心王

其心王の八と申すは

一には眼識、色を見る心。

二には耳識、聲を聞く心。

三には鼻識、香を嗅く心。

四には舌識、味を知る心。

五には身識、身に觸るゝ事を、熱し・冷し・和らか・麁しと知る心。

六には意識、萬の見聞く事、乃至見もせぬ聞もせぬ事をも、思案しつゞくる無邊法界の心也。

七には末那識、凡夫の心の底、常に濁りて、前の六の心は清く起る時も、我身我物と云ふ差別の執うせず、心の奥いつとなく、醉るが如くなるは、此末那識のあるに由てなり。

八には阿賴耶識、是れ一切諸法の根本にして、諸法の種子を含み藏め持てる心なり。此心なくは諸法の種子をは、誰か是を持たん。

持ち攝むる所なくば、諸法の種なかるべし。若し種なくば、いづくよりか生ぜん。前の七つの心は、皆種子を持つこと能はず。其道理教文は是を略し申候。

此八識に取て、前の六識は起らざるをりもあり。其やう又さま〳〵なれども、且らく人の能く眠入りて夢を見る時は、眼・耳・鼻・舌・身の五識皆起らざる時なり。夢に物を見・聞し・味ひ・熱し、冷しとも思ふは、皆第六意識の思慮分別なり。五識の起るには非ず。夢も見ぬ程に眠り入ぬるは、意識も又滅して、只彼の末那識・阿賴耶識のみあり。されば此二つの心は、いかなる時も、起らずと云ふことなし。生する時も死する時も、寐ても覺ても、長時に相續して永く絶ざる心也。今此二つの心ありと云ふ事は、極て知り難し。中にも阿賴耶識は極て甚深なり微細なり。故に小乘淺近の教中には是を說かず。大乘究竟の教の中にのみ之を說けり。謂ゆる華嚴・深密・楞伽・厚嚴等の經、瑜伽・顯揚・莊嚴・集量・唯識・十地等の論のみに之を說くなり。

○心所六位

抑も此八識は、心の中の本なるが故に、是を心王と名く。此八の王に多くの眷屬あり。之を心所と名く。具には心所有法と名く。略して心所と云ふ。是も同く心なれども、さま〳〵くさ〳〵に、こまかなる心をば、心の眷屬とす。是に六の位あり。

一に遍行、是に五あり、此五異なりと雖も、皆心の起る毎に遍く必ず有り、故に遍行と名く。譬へば王の出入の如く心王起れば必ず遍行の臣從ふ、一切時に於て相續して起り、八識に遍き故なり。

二に別境、是に又五あり、此五は各々別々の境を緣ずるが故に、別境と名く。境と云ふは、心の知る所の法なり。緣ずと云ふは、物を知ることを申すなり。

三には善、是に十一あり、凡そ色・心諸法の性を云ふに三性あり。善性・不

善性・無記性なり。無記と云ふは、善にも非ず惡にも非ざる性なり。此十一の心所は、其性必ず善なり。故に善と名く。

四には煩惱、是に六あり、委く開けば十あり。此十は有情の身・心を煩はし惱ますが故に煩惱と名く。

五に隨煩惱、是に二十あり、此二十は煩惱の等流種類なるが故に、隨煩惱と名く。所謂煩惱の中の枝葉くさ〴〵なり、是を隨煩惱と名く。

六には不定、是に四あり、此四は善・惡等の性も、此か有る所も、心王と俱なる樣も、皆不定なるが故に不定と名く。

遍行に五、別境に五、善に十一、煩惱に六、隨煩惱に二十、不定に四、合して五十一の心所となる。其名は百法論に說けたり。

一に作意の心所と云は、心を驚して起らしむる心にて、心を引て自境に趣かしむる也。

二に觸の心所と云は、心を心が知るべき事に、能く觸れしむる心也。

三に受の心所と云は、樂をも苦をも、心の中の愁喜をも、又捨受とていつれにも非ざる事をも、心に受取る心也。

四に想の心所と云は、殊に物の形を知り辨へて、其くさ〴〵の名を說く也。

五に思の心所と云は、心を善にも・惡にも・無記にも作りなす心也。

是を遍行の五と云ふ也。

次に別境の五は、別々の境を緣して、生ずることを得るが故に、又並て生ずるにも非ず。但し定と、慧とは、同し一境に轉ずれとも、多分に隨て名く。

一に欲の心所とは、善をも・惡をも・無記をも希望する心也。

二に勝解の心所とは、何事をもひしと思ひ定むる心也。

三に念の心所とは、經て過にし事を心の中に明に記して、忘れざる心也。

四に三摩地の心所とは、心を何事にても知らんと思ふ事に、とゞめて、散

亂せしめざる心也。是をば亦は定の心所とも名く。

五に慧の心所と云は、萬の知らんと思ふ事は、心を靜めて、得失を能く簡び辨へて、疑を除く心にて、是れ卽ち智なり。無漏智は禪定より生ずと云ふ是也。

別境の五と云ふは是也。此十は皆善なる時もあり、不善なる時もあり、無記なる時もあり、性はかく不定なれども、遍行は一切の心に定てあり、別境は三界の衆生に定て有り、故に不定の心所と名けず。

次に善の十一は、先づ

一に信の心所と云ふは、世の常に信を起すと云ふは是なり。誠の道大乘の法を見聞して、貴く目出たき事と、深く忍び願ひて澄み清き心也。

二に精進の心所と云ふは、善を修するに、勇み進て精く清き心也、勤とも云ふ。勤は三性に通ず、進は唯善性也。

三に慙の心所と云ふは、自にも耻ぢ、法にも耻ぢ、自ら心に耻て諸の罪を作らざる心也。

四に愧の心所と云ふは、世間に耻て、諸の罪を作らず、他の思はくに耻る也。

五に無貪の心所と云ふは、萬の事をむさぼる事のなき心也。

六に無嗔の心所と云ふは、心にかなはぬ事、我にそむく人ありとも、少しも怒る事なき慈心也。

七に無痴の心所と云ふは、萬の事に明かにして、物の理に愚なる事のなき心也。

八に輕安の心所と云ふは、身も心も輕く安く覺えて心うれしき也。此心所は常の時には起らず、定に入たる時に起る也。

九に不放逸の心所と云ふは、罪を防ぎ善を修する心也。世の常に恣に罪を作るをば放逸の人と申候。是はそれと相違して、殊に

罪をは恐れ憚り功德をば造らんと思ふ心也。

十に行捨の心所と云ふは、心を平等正直ならしむる心也。

十一に不害の心所と申すは、物を深く愍みて、損じ惱さず、凡て物體なくせざる心也。慈悲とは無嗔と不害とを申す也。無嗔は慈なり、不害は悲なり。

善の十一とは是なり。誰も皆、此善心の起る時は、此十必ず皆起る也。

禪定を得たる人は、輕安も起る也。此故に十一皆起る也。是は譬へば心王の忠臣孝子の如し。

次に煩惱の六とは、

一に貪と云ふは、萬の物を貪り、有るが上にもほしく拙き心也。貪の有力は威を以て取り、無力は他に從て求む。

二に嗔は我に背くことあれば、善事にても必ず怒る心也。

三に慢と云ふは、我身を憑て人をあなどり、少も謙下なき心也。

四に無明をば又は痴と名く。萬の事物の理に闇き心也。

五に疑と云ふは、何事にても、其理を思ひ定ること能はずして、とかくに物を疑ふ心也。

六に不正見は僻事をつよく思ひ定て眞實の道理を知らざる心也。論には惡見とあり。

煩惱の六と申すは是なり。是を十に開きやうは、不正見の中に五見として五つ相別れたり。

一には薩迦耶見、卽ち我見、又は身見とも云ふ。執着深く、我身人の身、我物人の物ときびしく別つ心也。

二に邊執見、略しては邊見とも申す、我身はいつとなく、有らんずる樣に思ひ、我死なん後は、永く失せなんずる樣に思ひ、魂は火の如く烟の如く消散すなどゝ、有情と非情と妄同し、是こそ至極の道理なりと思ふ心也。

三に邪見とは、罪と云ふ事もなし、功德と云ふ事もなし、地獄・餓鬼・畜生の果報もなし、人間・天上・淨土菩提の果報もなしと思ふ心也、則ち是は三寶を誹謗する心也。

四に見取見、略しては見取とも云ふ、劣れる事を勝れたる道と思ひ、頑空・斷無等を說き、是の如き僻事を執する諸の心を、いみじき心なりと思ひ、或は僻事云ふ人を、目出度く覺れると思ふ心也。

五には戒禁取見、略しては、戒取とも云ふ、是は外道の立たる戒を、いみじき禁戒なりと思ひ、或は其戒を說く人を貴しと思て、其戒を守りて、徒らに身を苦むる心也。　世の中に、外道の苦行と云ふは是なり、是は因に非ざるを因と計る、其始め無因に生じ、天命は理なり自然なり等と外書に苦み、分別の惑に依て煩擾惱亂す。

かく開けば十煩惱になる也。

次に隨煩惱の二十は、

一に忿と云ふは、腹を立て杖を取て、人を打んと思ふ程に、嗔る心也。

二に恨と云ふは、人を恨むる心也。　恨を結ぶ人は殘念口惜しとて、押へ忍ぶこと能はずして、心の內常に惱む也。

三に惱と云ふは、腹を立て人を恨むに依て、僻み戻り、心の中常に安からず、物を言ふに其言かまびすしく、險しく・鄙しく・暴く・腹ぐろく・毒々しき心也。

四に覆と云ふは、名・利を失はんことを恐れて、罪を作るを覆ひ藏す心也。罪を隱す人は、必ず後に悔み悲む事あり。

五に誑と云ふは、名・利を得んが爲に、心に異なる謀を廻して、奸ましく德ありと顯はす僞の心也。　世の中に誑惑者と云ふは、此心の增せる人也。

六に諂と云ふは、人をくらまかし迷はさんが爲に、異なる形をなし、時に

隨ひ事に觸れて、かたましく方便を廻して、人の心を取り、或は我過を藏す心也。世の中に、諂曲の人と云ふは、此心の增せる人也。

七に憍と云ふは、我身をいみじく盛なる者に思て、榮えおごり誇り、恣に高ぶる心也。

八に害と云ふは、人を哀む心なく、うたてしく情なき心也。世の中に慈悲性もなき者と云ふは、此心の增せる人也。

九に嫉と云ふは、心身の名利を求るが故に、人の榮えたるを見聞て、深くねたましき事に思ふて、惡み喜びざる心也。物ねたみする人は、此心の增せる人也。

十に慳と云ふは、財寶に耽着して人に施す心なく、彌々貯へんとのみ思ふ心也。慳貪の者と云ふは此心の增せる人也。

十一に無慙と云ふは、身にも耻ぢず、法にも耻ぢずして、善根を輕しめ、諸の罪を作る心也。

十二に無愧と云ふは、世間の他の見聞にも耻ぢずして、諸の罪を崇むる心なり。耻無き人と申すは、此無慙無愧の增せる人也。

十三に不信と云ふは、貴き目出たき事を見聞ても、忍び願ふ心なくして、穢れ濁れる心なり。かゝる人は多くは懈怠なり。

十四に懈怠は、諸の善事の中に、懈り懶うき心也。かゝる人は又多く不信也。

十五に放逸と云ふは、罪を防ぎ善を修する心なくして、恣に罪を造る心也。

十六に惛沈と云ふは、重く沈み溺れたる心也。瞢重として、目のくらむやうなるを云ふ。

十七に掉擧と云ふは、動き騷がしき心にて、振り廻し取上るやうにて、手鞠心とて定まらず、物にのり易く、をだてらるゝ心也。

十八に失念と云ふは、取はづし物を忘るゝ心也。かゝる人は多く散亂なり。

十九に不正知と云ふは、知るべき事を謬て解し知る心也。かゝる人は物を毀り犯す者なり。

二十に心亂と云ふは、心を散し亂す人は惡智を發して正く定りなく心流れ蕩けるが如し。此故に又散亂の心所とも名く。

隨煩惱の二十と云ふは是也。此中に無明と惛沈と相似て辨へ難し。無明は闇く迷へり、重く沈み溺れたるには非ず。惛沈は只闇く迷へるには非ずして、重く沈み溺れたる也。掉擧と散亂と又辨へ難し。掉擧は喩へば一の事に向て其心騷しきなり、且つ心をして解を易しむる也。散亂はあまたの事に、心のとかく移て亂るゝ也。且つ心をして緣を易しむる也。今煩惱は、其性必ず染汚なり。染汚と云ふは、不善と有覆なり。不善と云ふは惡なり。有覆と云ふは、惡までは無けれども濁れる也。此二性

は皆けからはしき心なるが故に、染汚性の法と名く。

次に不定の四とは、

一に睡眠の心所と云ふは、心を暗く狹からしめて、身を自由ならざらしむるなり。人の眠るは此心所の起れる時也。此心は毘婆舍那觀を障る也。

二に惡作は、萬の我が作す所を惡き事したりとて、後に悔む心也。かゝる故に悔の心所とも名く。此心は奢摩多觀を障る也。

三に尋

四に伺と云ふは、物を言はんとて、萬の事を推し量る心なり。是に取て、淺く推度する時をば尋と名け、深く推度する時をは伺と名くる也。尋るは淺し、伺ふは深し。尋伺は慧と思と並べて用ゆ。慧は急にして麁なり。思は徐にして細なりと雖も、安く正き時は思も麁なり、思ふこと深ければ、慧發して安心

○心王心所相應

也。正く慧を用れば徐なり、思が慧に隨ふときは不安なり。故に慧・思二つを用ゐる也。

不定の四と申すは是也。五十一の心所の相あら〳〵是の如し。

今此五十一心所は、皆心王の眷屬なれば、八識の心王に從へり。

眼識には三十四の心所あり。謂ゆる遍行五、別境五、善十一、煩惱の中の貪・瞋・痴、隨煩惱の中の無慙・無愧・不信・懈怠・放逸・惛沈・掉舉・失念・不正知・心亂これ也。耳識・乃至身識にも皆是の如し。意識には五十一ながら皆あり。

第七末那識には十八心所あり。遍行五、別境の中の慧、煩惱の中の貪・慢・無明・我見、隨煩惱の中の不信・懈怠・放逸・惛沈・掉舉・失念・不正知・心亂これ也。第八阿賴耶識には、只遍行の五のみあり。此等が中に煩惱・隨煩惱の起る時は、相應の心王も・遍行も、若し別境あらば其れも、若し不定あらば其れも、皆悉く染汚性なり。善の心所の起る時は、是等の法皆善性にして、煩惱・隨煩惱は起らず。煩惱・隨煩惱の起る時は、善の心所は起らず。無記なる時は、

○色法十一

五根

此等の法皆無記なり。八識に取て、眼識乃至意識、此六は善なる時もあり、染汚なる時もあり、無記なる時もあり。時に隨て其性ともかくも不定なり。末那識は、いつとなく染汚性なり。阿賴耶識はいつとなく無記性なり。其各々の相應の心所も、又是の如し。心王心所を具へたる一具を一聚と名く。一聚とは一村なり。されば八識は八村の心にてある也。喩へば八人の主、各々眷屬を具して、八村にてあらんが如し。然れば其一村の中の心王・心所は、必ず同性にて、善なれば皆善なり。染汚なれば皆染汚、無記なれば皆無記なり。此中前五識と第八識とは、何れも物を有りのまゝに知る心なり。第七末那識は、いつもひがめる心也。第六意識は有りのまゝに知る折もあり、ひがめる折もあり。八識の心王・五十一心所のありさま大旨是の如し。

次に色法十一ありと申すは、其名共又百法論にあり。

其中に眼根・耳根・鼻根・舌根・身根を五根と名く。先に申つる、眼識乃至身

識の所依の根なり。所依の根と云ふは、心の物を知る時、これを力として能く知るなり。喩へば、光ある玉を以て、物を照して能く之を見るが如し。五根は玉の如し、心の物を知るは能く見るが如し。知らるゝ物は見らるゝ物の如し。眼識・耳識なんと云ふと、眼根・耳根なんと云ふとは、別々の法なり。識と云ふは心法也。根と云ふは色法也。此根は謂ゆる人の實の目・實の耳・實の鼻・實の舌・實の身也。當時あらはに見ゆる眼・耳等は扶塵根と名け、まぶたなどの樣に、目のまはりの肉等に扶けられて、目は付て居る類なる故に、塵根を扶くる根と云義也。又は扶根とも云ふ。彼の扶根は色・聲・香・味・觸の五境、又は五塵と名くる物の類也。實の眼・耳等には非ず。實の眼・耳等は、顯はに見ゆる眼・耳等の底に、清淨精妙なる物の、玉の樣なるがある也。之を正根と名く。今の五根是なり。又勝義根とも云て、先づ目に就て云はゞ、眼識心王の起るに、此根に依て親く相應して、外の色形を見せしむる時は、彼の境を取て內の心法を引起し、眼の活用をなして物の色

形を見分る也。耳等も同じ道理也。然れども、此五識心王は現前の初一刹那とて、僅に一瞬の間のみ也。彼五識が働きにて、第二刹那からは、內の第六意識と、各同時に働きて、見分け聞分れとも、おもに第六意識が深く思ひやり、第七識が固く執り轉し送て、第八識に薫じつけ置く也。如何となれば、數年前に見聞せしこと、今現に見ず聞ざれども、思ひ出し、其色形・聲のよしあしまで分別するが如し。鼻・舌・身も爾なり。故に根と識とは功用別なり。扶根・正根は五根の中の二種なり。

次に色・聲・香・味・觸をば五塵とも名け、五境ともなづく。彼五識が五根によりて知る所の物なり。謂ゆる眼識は眼根に依て色を知る。色と申すは、青・黃・赤・白等の色なり。耳識は耳根に依て聲を知る。鼻識は鼻根に依て香を知る。舌識は舌根に依て味を知る。身識は身根に依て觸を知る。次第にかく配て知るべし。

次に法處所攝色と云ふは、是に五つあり。此五の色と云ふは、彼第六識

○不相應法二十四

が無邊法界の事を知る中にある色法也。常には青・黄・赤・白なんとこそ、色とは申せども、法門には聲をも・香をも・味も・觸も皆色と申す也。其中に、青・黄・赤・白等は、色の義あらはなれば、其をは顯色と名く。聲・香・味・觸は、色の義猶ほ隱れたれば、皆別の名を立る也。

今此心王・心所・色法の中に、實法あり、假法あり。皆依他如幻の法なれば、かりそめの相用なれども、假なる中にも重々の相用あり。故に己れの種子ある程の法をば實法とす。其實法の上に分ち出して、別の體なき者をば假法とす。此假法と無法とは異なれり。つや〳〵無き物をば無法とす。實に有るにも非ず、又つや〳〵無きにも非ず、假そめなる物を假法と云ふ。先に申候つる遍計所執は無法にて候。今申す假法は、依他起の中に開ける法なれば、無法には非ず、第六意識所緣の境也。

次に不相應法の二十四と云ふは、又百法論に列ねたる二十四也。是皆假法也。此二十四を不相應と名る事は、五蘊と申す法門あり。色・受・想・行・識。是也。此五の中の第四の行蘊には、諸の心所ならびに得・命根・衆同分等の法を攝めたり。其中に、心所は心王と相應すと云ふは、其と親く相とも なふ義也。此得等の二十四は、心王と相應せざるが故に、不相應と名く。されば具さには非色非心不相應行法と名く。此二十四は、心にも非ず色にも非ず、色法・心法の上に有らゆる義分なり、更に別の體なし。故に二十四ながら皆假法也。且らく、

一に得と云ふは、人の物を得たると云ふは、其得られたる金銀等の物も、正き得に非ず、能く得る人も正き得に非ず、又取らする人も得に非ず。能く得る人と、得らるゝ物と、寄り合ふとき、其中に得たりと云ふ事は候ぞかし。されば是は假法也。教に依て智を得たりとは、心の分位也。都に出で容貌を得たりとは、色の分位也。

二に命根と云ふは、壽なり、命と云ふ物は、別の體なし、唯生たる間一期の

身心を持てる用なり。

衆同分、異生性なども皆かやうの事なり。

人の身人の心を初として、馬・牛・蟻・蟻、食物・着物、舍宅・田園、山・河・石・瓦・金・銀、日月・星宿、雲・霧・雨・土、これに限らず、一切の諸の物の體を案ずるに、八識心王・五十一の心所・十一の色法に離れたる物は一もなし。此二十四の不相應は、是が上に立たる也。物にさま〴〵の名あり、物にくさ〴〵の數あり。其も此不相應法なり。四方四角、四季十二時も皆此不相應なり。更に別の體あることなし。能々案じとかせおはしますへいて候。依他起性の九十四の有爲法のありさま、あら〳〵是の如し。

次に圓成實性に六ありと申すは、六無爲なり。六の名又百法論の如し。此六は體性常住にして、他の爲に爲作せられず。爲作と云ふは、作り爲す義なり。他と云ふは緣なり。其緣に四あり。因緣・等無間緣・所緣緣・增上緣なり。

○四緣

一に因緣と云ふは、種子は現行を緣とし、又やがて種子を緣とし、又現行は種子を緣とするを云ふなり。此緣は緣の中に尤も親き緣なり。因の體やがて果と成る。其樣は奥に種子の事を申すところに申すべし。

二に等無間緣と云ふは、心の起るが滅する時、次の心を引起すを云ふ也。後の心は前の心を緣として生ずるが故也。

三に所緣緣と云ふは、心の知る所の物を云ふ也。心は知らるゝ物を緣として生ずるが故也。

四に增上緣とは、此外の諸の物の緣也。身は心を緣とし、我は人を緣とし、人は我を緣とし、有情は非情を緣とし、非情の中に舍宅山海草木等は大地を緣とし、大地は三輪を緣とし、舍宅の中に椽梁垣柱、さま〴〵の物共の互に緣となり、山海草木等の中に、風雨水石根莖枝葉華果、くさ〴〵の物共の互に緣となり、

乃至人の四肢五體よろづの物どもの、互に緣となるやう、無量無邊也。かやうの緣共は、皆增上緣なり。

是の如きの四緣によるは、皆他に作り爲さるゝ也。かゝる法は皆無常なり。眞如常住の妙理は、是の如きの四緣に作り出されたるに非ず。故に無爲と名く。但眞如は一味平等なり。實には六の體あるに非ざれども、位に寄せ、義相に寄て、六無爲を開く。

○六無爲

諸の障碍を離れたる事、虛空に似たり、故に虛空無爲と名く。

簡擇の力に依て諸の雜染を滅して究竟して證會するが故に擇滅無爲と名く。簡擇と云ふは智慧也、雜染と云ふは煩惱也、證會と云ふは能く明かに知る也。

又智慧の簡擇に依らざれども、眞如の體は元より淸淨なり。或は緣闕るとき自ら不生の理あらはるゝ、是等を非擇滅無爲と名く。緣闕るとき自ら生ぜずと申すは、何も物の生ずべきが、其緣闕て自ら生ぜざるやうになる事の候を申す也。

又苦受・樂受の滅する時、顯はるゝ無爲を、不動無爲と名く。苦受と申すは身に苦を受る心也。樂受と申すは身に樂を受る心也。此二は前に申候つる、遍行の心所の中の受の心所に攝む。

又想・受起らざる時に、顯はるゝ無爲を想受滅無爲と名く。想と申すは先の遍行心所の中の想の心所也。受と申すは、卽ち受の心所なり。凡そ此心所には五受と申して五の位あり。憂受・苦受・喜受・樂受・捨受なり。憂受と申すは、心の中に愁を受て、未だ身の苦には及ばざる也。喜受と申すは、心の中に悅を受て、未だ身の樂に及ばず。捨受と申すは、樂にも非ず、苦にも非ず、憂にも非ず、喜にも非ざるとき、有らゆる事を受け知る心也。苦受・樂受は先に申候ひつ。今受起らずと申すは、此五受皆起らざる也。

今此五の無爲は、皆眞如無爲の上に立て顯はすなり。眞とは眞實にし

て妄に非ず、如は常の如くにして倒に非ず。法性は眞實如常なる故に、眞如無爲と名く。

○人無我

我執

之を六無爲と名る也。眞勝義の中には、眞如と云ふ名も猶ほ假りに設る名也。實の法性は有とも云ふべからず、空とも云ふべからず、眞如とも云ふべからず、不可思議なるが故に、言語道斷なる故に。今此無爲の上に不相應を立る事あり。其も之を略し候。

大方の心王に八、心所に五十一、色に十一、不相應に二十四、無爲に六、合して百法なり。百法論には、此百法と二無我との名、つらねて候也。

二無我は、先におろ〳〵申候。又た先に補特伽羅無我と申候は、我の相を空する也。我の相と云ふは、我執の前に在りと覺ゆる相也。我執と申すは、有情とて、人にても牛馬にても、かやうの心ある物の有るを、實に有りと執して、我人の差別をつよく思へる心也。此は僻事を思ふ也。其故は、人と云ふ物は、唯諸の色と心との寄り合たるばかり也。長く短く方に圓に細く太きも色の體也。何ぞ況や、青黃赤白聲香味觸をや。頭よりあなうらに至り、皮より骨に至るまで、唯是等が寄り合たる也。此外に人の形は無し。譬へば、材木の寄り合たるを家と名く。材木の外に家と云ふ物なし。人身も是の如く、多くの心多くの色、寄合たる外には、何もなき也。

○法無我

法執

是の如く悟るを、補特伽羅無我とは申す也。

此寄合たる多くの色心の、一々の體を、實に定て有る物ぞと執する心を、法執と申し候。是も僻事也。其故は、此諸法は皆因緣より生じ、增上緣より起り、等無間緣に引れ、所緣緣に持たれたり。一として我れとある物なし。併しながら、他の力を蒙りて有り、他と申すは緣也。其緣も又別の物に非ず、則ち此諸法也。或は諸法互に緣となりて作り爲せり。是の如く、皆他の力にて有る物なれば、有りと云ふべき樣もなし。譬へば至て貧き人の、ひとへに人の助を守りて、世に有るは、世に有りと云ふべき樣もなきが如し。色心の諸法も又是の如く、有るに似たれども、實を云へば無し、

○眞如

是の如く悟るを、法無我とは申す也。

能く此二無我を覺れば眞如の理顯はる。眞如は無相なり。故に眞空を觀して之を顯はす。眞如の理の空なるには非ず。空に非ずと云へども、其物として有ることなし。其物として有ることなしと云へども、其性は又眞實也。所詮、眞如の理と云ふは、物の理の眞實なるを申候也。諸法は理を以て持てり、理なくんば諸法いかでか有らんや。此故に眞如とは諸法の性なり。性は則ち無爲なり、圓成なり。依他は諸法の相也。相は則ち有爲也。體事なり、其體事は眞實に非ず。有に似れども實の體事は無し。之を實と思ふて、體用を執するは、我法二執也。之を除くは二無我也。されば二無我は、百法の上の妄執を斷ぜんが爲に立たるなり。

抑も、今此百法を見るに、唯識の理猶ほ信じ難し。其故は、識と云ふは正く心王なり。心王の外に、已に心所あり・色法あり・不相應あり・無爲あり、更に唯一心に非ざるをやと云ふ。此疑を開き候樣は、心所は同く心なり。

○四分

相分

心王の伴類として、心王の外に有るに非ず、色法は心・心所が所變として、心に離れず。不相應は色・心が義分なれば心に離れず。無爲は色・心・心所・不相應が實性なれば、心に離れず。故に一切唯識也。

是が中に、色法を心・心所の所變と申し候は、先に申つる八識の心王と、五十一の心所とに、一々に四分あり。四分と申候は、相分・見分・自證分・證自證分なり。眼識にも此四分あり。乃至、阿賴耶識にも此四分あり。五十一の心所にも是の如し。

此中に自證分と申候は、心の正き體也。餘の三分は心の用也。用と申候は、體に備はれる功能也。

謂ゆる相分は、功能の中に知らるゝ功能なり。心と云ふ物は、物を知る外に別の樣なし。若し知らるゝ功能なり。心と云ふ物は、物を知る心の體、轉變して知らるゝ物となる。此知らるゝ用を相分と名く。諸の色法は、此相分の中にあり。されば色法は心に離れざる也。

見分と申すは、此相分を知る用也。知らるゝ物ありとも、正く其を知る功能なくば、爭でか知らんや。故に心の體、轉變して能く物を知る功能を起す、此能く知る用を見分と名く。

自證分は心の體として、中にありて、見分をも知り證自證分をも知る也。

證自證分と申すは、能く自證分を知る功能なり。心と云ふ物は明淨なる事、譬へば明なる鏡の如し。故に己が用を知るのみに非ず、還て能く己が體をも知る也。是の如き不思議の理は、我宗のみ談する所なり。

重て委く言はゞ、譬へば明鏡を以て物の形を照すとき、鏡の中に其影移れり。其影は鏡の外にある事なし。唯鏡の體淨きに依て、物に向へば必ず照す。故に照さるゝ用として現はるゝ所也。其鏡の光の親く照す所は、うつれる影なり。疎く照す所は、鏡に向へる物の本體の形なり。鏡の光は、清く磨ける銅の功能なり。鏡體は清く磨ける銅なり。されば、うつれる影と、之を照す光とは、鏡の用なり。相分は鏡の影像の如く、所緣の境

也。見分は能緣の識にして、鏡の明の如し。自證分は鏡の面の如し。證自證分は鏡の背の如し。面は背に依り背は面に依る。鏡を離れて其物體なし。心の物を知るありさま亦た是の如し。知らるゝ物の、心の中に浮べるをは、相分と名く。鏡の影像の如し。其相分の本體の形をは本質と名く。其本質は又阿賴耶識の相分なり。阿賴耶識の相分には、別の本質なし。能く知る用の、心の上に起るをば見分と名く。鏡の光の如し。能く浮べ能く知る用を起す體をば、自證分と名くる也。鏡の體の清き銅の如し。

且らく眼識起りて、青黃等の色を緣ずるとき、眼識の前に、其色浮み顯はるゝ、是は相分也。其色の本質は、則ち第八識の相分なり。眼識の能く是を見る用は見分也。此見らるゝ色の用と、見る見分の用とを起すは、眼識の體なり。體は則ち自證分也。是に隨ふ心所も皆是の如し。耳識の聲を聞き、鼻識の香を嗅き、乃至、意識の萬の事を思惟分別する時の、心王・心所

の有樣も皆是の如し。次第に思し召し合さるべく候。

但末那識・阿賴耶識の物を知り樣、未だ申候はず。末那識は阿賴耶識の見分に向て、是れ我なりと思ふ。此外に物を知ることなし。無始より以來是の如し。

○種子

阿賴耶識は、種子と・五根と・器界との三種の境を變現し、此三つを知る。種子と申すは、諸法の種なり。五根と申すは、色法の十一の中の眼・耳・鼻・舌・身なり。器界と申すは、山河大地舍宅田園等也。

末那識も阿賴耶識も、四分の有樣は皆同事なり。之に從へる心所も又爾なり。されば色法も心法も一心に離れず、一切唯識也。

次に種子の事をろ〳〵申候べし。先つ種子と云ふ物は、何なる物ぞ。何として出き、何樣に物を生ずるぞと云ふに、種子と申す物は、色・心の諸法の氣分なり。色にも心にも、各々實法あり、假法あり。其中に實法は、皆種子より生じて、種子を薰ず。薰と申すは、己が氣分を留め置く也。

○現行

○刹那生滅

留め置き樣は、先づ且らく、眼識起りて色を見るかとすればやがて滅す。滅するかとすればやがて生ず。生と申候は、やがて色を見る也。是の如く、念々生滅する間、其知らるゝ色も、見る眼識も、生ずる時は必ず各己が氣分より生ず。滅する時は各己が氣分を殘す。殘す所の氣分は、色のも心のも、皆隱れ沈みて其形を見がたし。併しなから、阿賴耶識の中に落ち聚る。此氣分を種子と名く。

此種子より色・心の生ずるをば現行と名く。色は色の種子より現行し、心は心の種子より現行す。必ず己の氣分より現行して、他の氣分よりは現行せず。現行と申すは、種子にてある時は隱れ沈みたるが、顯はれ起りたるを申候也。眼識の如く、耳識の起りて聲を聞き、乃至、末那識か阿賴耶識の見分を緣ずるも、皆是の如く種子を薰ずる也。

凡そ有爲の諸法は、皆刹那刹那に生滅す。刹那と申候は、時の至て短き也。髮筋一本を切るよりも猶ほ速に、電の光よりも猶ほ迅し。指を彈く

間に六十五刹那すぐると申候。時の次第に過ぎ行くを以て、御心得あるべく候。過るは則ち滅する也。之を過去と名く。來るは則ち生ずる也。之を現在と名く。未だ來らざる後々をば未來と名く。何の物か過ぎぬ事や候。暫らくもこらえて過ぎぬ程と云ふ物なし。天地山河のいつともなく有る樣なるも、今日は昨日のには非ず。夕は朝のには非ず。只今のは其れより先のには非ず。是の如く次第〳〵に、せめよせて見るに、滅することの早さは、譬て言ふべき物もなし。世の中に久く覺ゆる物すら是の如し。況して餘の物は申すに及ばず候。但是の如く滅すと雖も、常に有りと見ゆるものは、滅すればやがて同じ形にて生ず。其生ずることの速なる程も、又滅するが如し。かゝる故に、常に有りと見ゆる也。譬へば、水の上にふる雪の、ふればやがて消え、消ゆればやがてふるが如し。消ると雖も、水の上には常に雪の有るやうに見ゆるが如し。世の中の人の、無常なりと思へる物は、滅して後に生ずることの遲く、又やがて生ずれども、同じ形にては生ぜず。先には替りて生ずる物なり。されば生ずれば滅することの早さは、一切の有爲の法皆同じ事也。生ずることの遲さは、物に隨て不定なり。永く生ぜずして止む物もあり、遲く生ずる物もあり、やがて生ずる物もあり、或時はやがて生じ、或時はおそく生ず。時に隨て不定なる物もあり。いづれも同樣に、刹那刹那に生滅する物もあり。凡夫は迷亂して常住なりと思へり。實には皆無常なり、色も心も皆爾なり。心の中にて末那識・阿賴耶識は絶えず滅して、やがて生ず、意識は打任ては絶えず、希れに起らざる時もあり。五識は滅して、やがて起ること希なり。時にはさる事もあり。此の如く有爲の諸法の滅する度ごとに、各々氣分を殘し置くを、種子を薫ずとは申候。されば萬の物は、皆我身の中にある、第八阿賴耶識の中の、各々が氣分より起り出て、心ともなり身ともなり、衣服飲食ともなり、家とも寶とも成り、天地國土山河草木とも成る也。

法相二卷鈔 上卷終

法相二卷鈔 下卷

新薰種子
本有種子
有漏無漏種子

阿賴耶識の種子をも、阿賴耶識の中に持てり。但阿賴耶識は、種子を受け持つ法にして、種子を薰ずる事はなし。阿賴耶識の種子をば、意識と末那識が薰ずる事にて候也。其樣は事長く候へば略し候也。

抑も今申候種子は、新薰種子なり。始て薰じ出すが故に新薰種子と申候也。此外本有の種子あり。本有種子と申すは、始て薰じ出せるに非ず、第八阿賴耶の中に、無始法爾として其氣分あり。此に二類あり。一に有漏の法爾種子なり。二には無漏の法爾種子なり。彼にも是にも色・心萬差の種子こまゞゝと皆有り。今此本有・新薰・有漏・無漏の諸の種子も、皆有爲の法なれば刹那生滅す。滅するときは、各々後の種を引起す。謂ゆる色の種子は滅する時に、色の種子を引く。心の種子は滅する時に、心の種子を引く。色の中にも多くの色あり。心の中にも多くの心あり。皆是

○五姓各別

の如く其我類を引くなり。此故に諸法の種子たゆることなし。譬へば早き河の流て速に過れども、流れ續きて絶えざるが如し。されば種子は現行を生じ、現行は種子を生ず。種子は又種子をも生ず。此三の緣は因の體則ち轉じて果と成る。其緣尤も親し。先に申候つる四緣の中の因緣は、此三の因緣なり。新薰・本有の種子の相、略して是の如し。

其法爾無漏の種子の中に、佛の種子あり、緣覺の種子あり、聲聞の種子あり。是を三乘の種姓と名く。此三乘の種姓を具ること、人に隨てさまざまに不同なり。或衆生は佛の種子のみあり、此衆生は聲聞にも成らず、緣覺にも成らず、直に佛と成る。之を頓悟の大乘と名く。

定姓二乘

或衆生は緣覺の種子のみあり、直に緣覺に成て、無餘涅槃に入る。或衆生は聲聞の種子のみあり、此は聲聞に成て無餘涅槃に入る。此二人は定姓二乘と名く。

或衆生は三乘の種子三ながらあり。此は先づ聲聞にも、緣覺にも成りて、後に佛に成る。之を漸悟の菩薩と名く。

漸信菩薩

或衆生は三乘の種子皆なし。此人はいつとなく、凡夫にてはつる也。之を無姓有情と名く。

無姓有情

○無餘涅槃

無餘涅槃と申すは、身も心も皆滅び失せて、全くいづくにも生ぜず永く去りはつる也。是れ則ち有無の諸法は皆盡き失せて、無爲常住の法性の眞理のみに成る也。之をいみじき事にして、聲聞・緣覺は、かく成らんと願ふ也。寂滅爲樂なれば、誠に是もいみじき果也。身も心も永く失せぬと聞けば、心細き樣に覺ゆるは、凡夫の心の拙くして、身を愛し生を貪ぼる煩惱に惑はされて、涅槃寂靜無爲常住の樂を恐るゝ也。若し夫れ我身は失せ、生は永く絶えぬるとも、其は苦しからず、唯さなりぬれば、衆生利益の德の永く闕けなんことの心憂ければ、聲聞にも緣覺にもならじ、唯佛にならんと思はんは、目出たき心なるべし。是れ則ち大乘心なり。方に知りぬ、

（往生淨土の本意）

淨土菩提に至りなば、身も樂しき世にも有らんずれば、其に至らんと願ふ

は、全く淨土菩提を願ふには非ず。唯是れ生死輪廻を願ふ也。生れて何にかせん、生ずる物は必ず滅す。樂しくて何にかせん、有爲の樂は必ず盡る期あり。淨土の樂は此世の樂に異なるが故に、菩提の果は生れて至る所に非ざるが故に、されば唯衆生濟度の爲に、二乘にはならじ、佛にならんと思ふべき事にこそ候なれ。此心は則ち淨土に生るべき因也。衆生濟度する間には、身を失ひ命をほろぼす事いくばくぞ。衆生の爲には、設ひ身・智永くほろぶとも厭はじ。左なりても、利益だにもあらば、痛みとする に足らず。然れどもさなりなば、衆生利益の事かなふまじければこそ、佛になり度候べけれ。是を以て明かに知ぬ、菩提心なくては、淨土に生ぜずと云ふことを。但これに付て、尋ねて曰く、衆生の淨土を願ふは、樂しからん爲にてこそあれ。今聞く樣ならば、淨土に生れて何かせん。唯穢土に生れて有りなん。衆生濟度は、穢土こそ猶ほ勝れたるが故也。此難を答て曰く、誰か云ふ淨土を欣ふこと欲樂を本とすとは、欲樂の爲に生れんと思はんものは、生るゝことあるべからず。還て穢土に生れて生死に輪廻すべし。欲樂は穢土の法なるが故也。淨土の樂は愛欲の樂に非ざるが故也。是に依て淨土に生るゝことは、二の願に依るべし。一には見佛聞法の爲に淨土に生れんと思ふ。穢土には見佛聞法かたきが故に。其見佛聞法は則ち利益衆生の爲也。二には衆生利益の爲に淨土に生れんと願ふ。淨土に往生し見佛聞法し、直に還り來て穢土に生れ、衆生を利益せんが爲に往生を願ふ也。淨土には苦を受る衆生なくして、大悲の所度かけぬるが故に、此穢土の衆生利益は則ち大菩提の爲也。此の如く願ふは淨土に生るゝ業因となる。

「前にも申せし如く、業は秤の如く重き者先づ引くが故に、決定し淨土に往生せんとする人は、行・住・坐・臥ねてもさめても、一佛の名號を稱し、又淨土の相を觀じ、餘は何事も雜へず、一切の善事功德、戒・定・慧も、皆往生の爲に廻向し、深く穢土を厭ひ淨土を欣求し、一向に佛願を仰ぎて、長時不退に唯念

（此頃一本ナシ）

（往意二願）

佛三昧になるを淨業と云ふ。かく決定して信願行の具足したる人は、必ず淨土に往生する也。又問ふ、穢土の衆生濟度は大慈大悲が菩提心ならば、何ぞ淨土に往生してひまのびんよりも、直に穢土に生れて利益するぞ勝るべし。答ふ、假令戒定慧ありても、屢々生死する中には隔生即忘し、富貴に生れて德を失ひ、惡緣に依て三塗にも墮するは厭はずとも、己れ迷苦の中に落ちなば、何ぞ他を利益せん。淨土は不退の佛界なり。一度往生を遂る人は、濟度の爲に幾度穢土に生れても、臨終には必ず淨土にかへるが故に輪廻せず。故に菩薩も淨土を願ふて往生す。況や凡夫をや。かく言へばとて全く依怙するに非ず、心散亂すれば何の行も成就せざる故なり。」

但し菩提心に無量無邊の階級あれども、其大旨唯慈悲正直なり。

「我宗（此頃一本ナシ）の祖師たち、慈恩大師・撲陽大師等、他宗の天台大師等、無量無邊の菩薩たち、淨土にましませば、我等も常に淨土を願ひ候。何とぞ往生の御心掛專一に御決定なさるべく候」。

五姓各別の次に、私の所存申上候也。僻事にても候らん。おろ〳〵申候。尋て曰く、五姓各別の義に付て、我身も定姓無姓にてもやあらん。さらば淨土菩提を願ても由なし。いかなりとも叶ふまじき事なれば、此の如く身を疑はゞ菩提心を起す人ある可らず。如何して我身は一定佛に成るべき衆生にて有ると云ふことを知るべきや。答て曰く、須く五姓の權實を定べし。豈濟度の方便を論ぜんや。五姓もし眞實ならば、密意の方便を廻して、衆生の發心を勸むべし。其れ何の痛みかあらんや、寧ろ愚者の疑網を恐れて、法門の實理を談ぜざらんや。何に況や、形の如く唯識の教を習ひ、又悟（覺イ）らんと思ふ願をも發さん程の人は、定て佛の種子を具せる衆生也。其故は深密經に定姓・無姓は此教（イ）機に非ずと嫌へるが故也。誰の有智の人か、金言を信ぜずして徒らに生死に輪廻せんや。又法華經をもよみ、若しくは其心をさとらん程の人は、佛の種なからんや。法華と

○業種子・名言種子

唯識とは又是れ一體なり。其樣も略すべし。

種子の有樣大旨此の如し。此外、業種子・名言種子と申す事候。名言種子と申候は、上に申候つる種子也。善の種子は善の現行を生じ、惡の種子は惡の現行を生じ、無記の種子は無記の現行を生ずるを申候。業種子と申候は、惡心を起せば惡の種子を薰じ、其種子の力に依て、三惡道に生る。善心を發せば善の種子を薰じ、其種子の力に依て、人中・天上に生るゝを申候也。されば是も前の種子に離れたる事は候はず。されども其種子より起る果報の樣は、少し替りたる也。

○總報別報

三惡趣・人中・天上の體は阿賴耶識也。阿賴耶識は、其性無記也。之を總報と名く。此外に別報と云ことあり。其も無記なり。此故に善業の種子の力にて、無記の果を起し、惡業の種子の力にても、又無記の果を起し候也。委くは事長く候。

其に取て、佛の種子ある人の、修行して佛になる時、心の發り悟の開て迷ひ候はぬ樣は、先に佛に成へき種子も、唯一にては候はず。其種子さまざまに相分れたり。先づ八識の種子あり。諸の心所の種子あり。心所は廿三あり。煩惱の六と、隨煩惱の廿と、不定の中に睡眠・惡作と、此廿八は無し。此等は皆有漏に限る法なるが故也。

○無漏八識種子

○四智

此が中に前五識をば成所作智と名く。意識をば妙觀察智と名く。末那識をば平等性智と名く。阿賴耶識をは大圓鏡智と名く。其故は無漏の眼識乃至身識の五は、皆神通變化の所作をなすこと勝れたり、此故に成所作智と名く。無漏の意識は妙に機根を觀察して、說法斷疑の用勝れたり、此故に妙觀察智と名く。無漏の末那識は永く我執を離れて、平等の法性を證するが故に、平等性智と名く。無漏の第八識は、永く阿賴耶の名を離れて、一切の諸法を浮かべる(知イ)こと、大に明なる鏡の、一切の物の形を寫すが如し、故に大圓鏡智と名く。

○識智强劣

抑も識と云ふは、心王の名なり。智と云ふは心所の中の慧の心所なり。有漏にも識・智みな有れども、有漏の位には識こわき故に、殊に八識と名く。

○三品無漏

智も異る心所なきに非ず。無漏の位には智強きが故に、殊に四智と名く。識も異る心所なきに非ず。無漏の八識には、皆一々に慧の心所あるが故也。此外、諸の眼・耳・鼻・舌・身、色・聲・香・味・觸なんどの種子皆あり。其性皆善也。此諸の無漏の種子も、阿賴耶識に離れずと云ふとも、而も阿賴耶識の知る所に非ず。

其に取りて、無漏には三品の無漏と云ふ事候。三品と申すは下品・中品・上品なり。下品と申すは見道なり。見道と申すは、初て無漏の智の起て、麁き障を斷ずる時也。中品と申すは修道也。修道と申すは、無漏の智の重て猶起て、細なる障を斷ずる時也。上品と申すは佛也。諸障皆斷盡して悟(サトリ)のきはまる位也。此三を三品の無漏とは申す也。上に申候つる諸の無漏の種子を、此三品に分ちあて候樣は、下品の種子には妙觀察智・平等性智の種子のみなり。相應の心王・心所、及ひ所變の色法の種子、皆是が中にあり、其外は無し。中品の種子も亦是の如し。下品の妙觀・平等の二智には、各々皆二十一の法あり。妙觀察智には二十一の外に、尋の心所と・伺の心所とあり。故に總して二十三なり。上品の種子には、四智の種子みな有り心所は何れにも皆二十一なり。佛には尋・伺なき故也。五根・五境の種子も皆あり。如來の三十二相・八十隨好、無數の大光明、無邊の淨土等も、皆悉く此中にあり。無漏の色・聲・香・味・觸離れざるが故也。されば紺頂金容の姿、丹菓青蓮の粧ひ、花臺玉樓の構へ、八功七重の莊り、併なから我心の內にあり。何に況や、法性清淨にして、無數量の微妙の功德本來具足せるをや。我身即佛也、此處即淨土也と觀せんも、全く相違なき也。然れども、我身ながら我心をつかうこと能はず。無明の迷は闇の如くに暗く、薩伽耶見の執は石の如くに堅ければ、觀ずと雖も仍(明カナラズイ)たしかならず。譬へば深き闇の風はげしきに、幽なる燈を以て行くが如し。

「本より貪・瞋・痴の三毒は、胸に迫る大病人の目も定かならず、歩行を惱めるをりしも」(本ヨリ一ヲリシモマデ一本ナシ)、須臾にして燈滅し、黑暗(昧ニシテ揣シイ一ノ長夜以下一本ナシ)の長夜なれば、諸の恐ろしき邪魔惡鬼

四方に滿ちて苦める、誰一人救ふ者もなく、是まで修し得たる大我慢・大貪欲の業力も出せば、いよ〳〵沈み落ち、永劫にもいつかは明けん朝もなし。誠に悲き身の果てかな。此日頃、邪見强きが故に、智者も教へる手たてなく、善人も不信を疎みて遠かりぬれば、己れが心にかなふ邪人と親み、他の信善までも誹謗し、一家及び有緣の信心をも碎き、共に深き暗穴に落し入るゝの罪、いづれにか報ふべき。今世はしばしの間、榮花に過るとも、成れる末こそ痛ましけれ（けれマデ一本ナシ）」。何に況や、心（イ）ある善き人（ム）も、眼を佛教に隔て、生を邊鄙（界イ）に受る輩をや。何に況や地獄・餓鬼・畜生の衆生をや。此故に無上大覺の種子、徒らに沈み埋もれて、現行を生ずること能はず。栴檀の種の土の中にありて、さま〴〵の臭く穢らはしき物に埋もれて、未だ生い出ざらんが如し。然るを根熟し時至れる人は、衆生の爲に佛にならん。菩提の爲に衆生を利せんと云ふ心つよく起て、寢ても覺ても忘るゝ時なく、念々相續し、生々世々に、「生死（生死ヨリ一點モマデ一本ナシ）すること（一本ナシ）も、惡緣に逢ふても、大慈悲心更に一點も」動くことなければ、我と教を開き、若人の說くをも聞て、彼三品の無漏の種子漸く潤て、彼の栴檀の種の生ひ出づべき時やゝ近付て、雨露の潤を蒙むるが如し。是の如くして、其心深く堅く成行けば、教を學し行を修し、功德を積むに隨て、智慧の位次第に進み、慈悲の德漸々に重て、一大無數劫を經ぬれば、凡夫の分齊の悟りは爰に極りぬ。無漏の種子悉く潤へる中に、下品の無漏已に生じなんとす、而て未だ生ぜず。初て堅固の菩提心を起せしより以來、此位に至るまでを、地前の菩薩と名く。未だ十地に入（至イ）らざる故也。

○地前三十心

此一大無數劫が間、覺の深く成り行く重々を申候に、三十心と云ふ事候。謂ゆる十住・十行・十廻向也。此中の第十の廻向の終り、法界無量廻向の位に、加行の位を開く、之を四善根とも名く。燸善根・頂善根・忍善根・世第一善根（法イ）是也。此四の位をば明得定・明增定・印順定・無間定と名く。是より外の三十心をば、皆資糧の位と名く。佛道の粮をたくわふるが故に資粮と名く。其終りには、殊に見道の方便なるが故に加行と名く。「此資粮と加行（一本此ヨリ申也マデナシ）

加行

資粮

○二障　煩惱障　所知障

との三十心の間の久き修行を一阿僧祇劫と申す也」。

今此地前に、諸の障を多く伏す。障と申すは、煩惱障と所知障と也。煩惱の樣は先に申候ぬ。又隨煩惱をも是に攝む。所知障と申すは、彼の煩惱の一々の法の底に、體に迷へる心也。煩惱よりは斷じ難き障也と云へども、煩惱の外に別の體あるに非ず。唯煩惱の底の幽に深き分を所知障とは申候也。譬へば夜る杭を見て人と思ふとき、杭なることを知らぬ心と、人かと思ふ心と、二重なれども、人と思ふ心の外に杭と知らぬ心なし。唯用に迷ふと、體に迷ふとの二重なり。煩惱・所知の二障も又是の如く、煩惱は人と思ふが如し。所知は杭と知らざるが如し。貪にも此二重あり、瞋にも此二重あり。乃至二十の隨惑にも、一々に皆是の如し。

此煩惱に龜き類あり、細かなる類あり。龜をば分別煩惱と名く。其底の所知障をば分別の所知障と名く。今此分別の二障をば見道に斷ず。細かなるをば俱生の煩惱と名く。其底の所知障をば俱生の所知障と名

く。此俱生の二障をば修道に斷ず。

○伏斷差別

斷と申すは、無漏の悟開（覺リイ）くる時、煩惱・所知の種子の永くほろび失するを申候也。伏と申候は、未だ其種子を失ふには及ばず、種子は猶あれども、智慧の力に依て現行の起らざるを申す也。今地前の菩薩、諸の障を伏すと云ふは、分別の二障をば、資粮の位に漸く伏しはじめて、加行の位に伏しをはる。又俱生の二障をば、加行の位に漸く伏しはじめて、地前に未だ伏しはてず、地上に伏しはつる也。「地前（一本此句ナシ）と申すは前の三十心加行までを云ふ」。地上と申すは、初地以上也。其樣次に申候べし。

○切

されば地前の一大僧祇劫が間は、障を伏して未だ斷ぜざる也。僧祇劫と申すは無數劫なり。無數劫と申すは、譬へば廣さも高さも、八百里にはばかり候はんづる程の石を、天の衣の極て薄く輕きにて、稀れになでし候はんずるに、其石の次第につひ失せて、物もなくならんまでの、久しさを一大無數劫とは申候也。地前の久さは是にて候。

○見道

かくしつゝ、凡夫の分齊の覺り極りぬれば、無漏の種子、遂に初て下品の現行を生ず、則ち是れ下品の妙觀・平等の二智也。此時より初て眞如の理を悟り、能く分別の二障を斷ず、是を見道と名く。是に又重々あり、一心眞見道・三心相見道・十六心見道、次第〳〵に續て起る。是れ十地の中の「初地の」始也。此「眞と相との見道」を、通達位と名く。「眞如に體通會達する故也」。初地の入心「の所」也。是より後を聖者と名け、地上の菩薩と名く。

○十地

十地と云ふは、歡喜地・離垢地・發光地・焰慧地・極難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地なり。

初地と云ふは初の歡喜地なり。今此十地と申すも、悟の開けて漸々に佛に近づく心の位の重々を十に分くる也。一々の位の中に、多倶胝百千大劫を歴ると候へば、初歡喜地と云はるゝ間も、ゆゝしく久く候。見道は三重なれども、時分短きが故に、見道を出て修道に入ても、猶初地の內也。

○修道

修道に入ると申すは、妙觀・平等の二智重て起る也。是れ則ち中品の無漏の種子より生じ候也。其悟うたゝ明かにして、前に申候つる倶生の惑を斷し初る也。惑と申すは障を申候也。此倶生の惑に取て、煩惱所知ある中に、菩薩は倶生の煩惱をば、第十地の終りに、佛になるとき斷ず。其より先き修道に入てより以來は、漸々に倶生の所知障を斷じ候也。されば見道より出て、猶ほ初地にてある間も、初地の障の倶生の所知をば斷ず。初地より第二地に至り、第二地より第三地に至り、乃至第九地より第十地に至るにも、次の地に入る毎に、次の地の障となる倶生の所知障を次第に一々に斷ずる也。かくしつゝ第十地より佛になる時は、佛果の障となるものを斷ず。

○佛果之障

佛果の障と云ふは、斷しのこせる倶生の所知障と、わざと斷ぜずして置たる諸の倶生の煩惱となり。此二の障よく佛果を障るが故に、正く成佛する時之を斷ずる也。菩薩の倶生の煩惱をおさへて、十地の間に斷ぜずして置くことは、一には十地の障に非ざるが故也。一には衆生濟度の爲

なり。此外にも故候。其樣とも略し候。

十地には殊に勝たる事候。各一の行を修して、一の障を斷じて、一の眞如を證す。所修の行をば十波羅密と名く。所斷の障をば十重障と名く。所證の眞如をば十眞如と名く。其樣も略し候。

さて初地より第七地の終に至るまで、又一大僧祇劫を經る。是れ第二僧祇なり。第八地より第十地の終に至るまで、又一大僧祇劫を歷る。是れ第三僧祇なり。地前の一大僧祇は是れ初僧祇なり。之を三僧祇劫の修行と名く。

○無漏種子薫

其間の無漏の智も、刹那刹那に生滅す。滅する毎に種子を薫ず。薫ずる樣は有漏の種子の如し。無漏心の種子を薫ずることは、見道の第二念より薫じ始む。第二念と申すは第二刹那なり。無始より以來凡夫にてありつる程は、無漏の新薫種子なし。無漏心起らざれば誰か是を薫ぜん。故に見道の最初の刹那の智は、偏に法爾無漏の種子より生ず。其後新薫種子出で副て、本有種子・新薫種子寄り合て生ず。之を新古合生と名く。新古合生は無漏のみに非ず、無始より以來、有漏の諸法も亦た是の如し。何れの法も、本有・新薫の二類の種子、俱に有には、必ず新古合生し候也。

○相好百劫修行

此三大僧祇に取て、初僧祇には有漏の覺りのみ起りて、未だ無漏の覺開けず。第二僧祇には有漏・無漏雜りて起る。第三僧祇には、偏に無漏の覺のみつゞきて、有漏の智雜はることなし。功德念念に早く積りて、覺り刹那刹那に速に開く也。初刹那は前の二僧祇に一倍し、第二刹那は初刹那に一倍す。一倍と申すは、本より有つる程の猶ほ加はり添ふを申候也。是の如く、第三刹那・第四刹那、乃至第十地の終の刹那まで、次第〳〵に倍々す。

第三僧祇の修（終り方）の上に、相好の百劫と云ふ事候。謂ゆる佛に成らんとする期近付て、殊に百劫が間諸の相好の業を修する也。是の如き諸の修行滿足するとき、色究竟天とて、物の形のある分齊に取ては、上のはてにて候

所よりは、猶ほ上の大自在宮と申候淨土にて、十阿僧祇百千三千大千世界にはゞかる程なる、大寶蓮華王の座の上に坐して、金剛喩三摩地と申す定に入て、前に申候つる、佛果の障をば斷ずる也。此時を等覺の菩薩と名く、受職灌頂の儀式この位にあり。

○究竟道

此の如くしつゝ、佛果の障早く斷じ畢りぬれば、速に究竟道に入る。此時一切の有漏、劣の無漏は、皆ほろび失せぬ。是は謂ゆる彼の無始より具する所の、上品の法爾無漏の種子より、四智悉く現行し、萬德圓滿する也。

○無漏唯善

是を佛と名く。

凡そ因位も果位も、心も色も無漏の法は、其性皆善也。有漏の三性雜はるには同じからず。既に成佛しぬれば、其身法界に滿ちぬ。諸根相好一々に無邊也。三大僧祇の中に修習する所の、無邊の善根に酬たるが故に、因果の理必然として、因無邊なれば果無邊也。

○佛果無薫

是より後は、新く種子を薫ずる事なし。唯無始よりの上品の法爾無漏の種子、及び下品・中品の無漏の種子の本有も・新薫も皆轉じて上品になれるのみ、無垢識の中にあり。無垢識と申すは、大圓鏡智相應の心王なり。則ち凡夫より第七地までは、之を阿賴耶識と名く。第八地より等覺までは、之を異熟識と名く。佛に成りぬれば無垢識と名く。無垢識をば梵には阿末羅識と名く。是れ則ち八識の中の第八識也。凡そ第八識には樣々の名ども候。阿陀那識も此識の名なり。此故に佛に成て後も、八識あり。心所は各二十一也。前に申候ぬ。

○八識三名

今此心王・心所一々に皆四分あり。其相分の中に五根・五境あり。五境の中に如來の相好莊嚴大光明等あり。不可說不可說の淨土あり。是等の法の中に、實法としてある法は、皆一々に種子あり、其種子は併ながら如來の無垢識の中に藏め持てり。生ずる時は其一々の種子より生ず。既に生ずるが故に又必ず滅す。種子も刹那刹那に生滅し、現行も刹那刹那に生滅す。是れ則ち衆緣の爲に作りなされたるが故なり。既に衆緣の

○佛果四分

作す所なれば、佛身なれども、之を有爲と名く。有爲と名くと雖も、二種の生死を離れたり。

○二種生死

二種の生死と云ふは、分段生死・變易生死なり。分段生死と云ふは、我等がうくる生死なり。長きも・短きも、其命必ず限ありて、久しからんと思へども、叶はざる果報なり。變易生死と云ふは、菩薩の受る生死なり。久しからんと思へば、いくらも久し。命に定れる限りなし。但佛に成るときのみ、其身をすつ。佛は長く二の生死を離れたまへり。生も生死の生に非ず。生死の生は、業力に依て三界に生ずる義なり。佛身の生は、有爲の無漏の起るを生と名く。三界に生ずる義には非ざる故なり。滅も生死の死に非ず。生死の死は業力盡きて命終る義なり。佛身の滅は、有爲の無漏の刹那に滅するなり。佛の命は盡る時なく無量壽なるが故なり。

（佛身生滅）

（佛壽無量）

唯是れ法體微細の刹那生滅也。かゝる故に、出離生死の佛身と名く。若し生はあれども滅なしと言はゞ、此ことわりあることなし。之を有爲の

（出離生死）

報佛と名く。

○自受用身

今此周遍法界の相好莊嚴の有爲の報佛を、自受用身と名く。既に是れ衆生の爲になりたまへる佛なれば、衆生を利すること暫くも止む時なし。此故に凡夫・二乘・地前の菩薩・十地菩薩・等覺まで、之を濟度しまします也。而るに周遍法界の實の御姿は、等覺の菩薩すら猶ほ見ること能はず、何況やそれに及ばざる菩薩・二乘をや。何況や我等が類をや。故に人に見えんとてさま〴〵の姿を顯はしまします。其中に、我等が爲に顯はれましますは、丈六の佛なり。一四天下を國土とす。資粮位の菩薩・聲聞・緣覺までも、同く見たてまつる佛也、之を小の化身と名く。加行位の菩薩の爲に顯はれます御姿は、御長いくらとも申たる事はみえねども、三千大千世界を國土とすと候へば、ことの外に大に顯はれましますにこそ候はめ、之を大の化身と名く。

○變化身

○他受用身

初地の菩薩の爲には、一葉の廣さ三千大千世界に、はゞかる程の蓮華の

○三身

百葉なるを座として、其座に叶ふ程なる佛にて顯れます。第二地の爲には千葉の蓮華を座とす。第三地の爲には萬葉の蓮華を座とす。乃至、第十地の爲には、不可說不可說の蓮華を座とす。各々其座に相かなふ程の御姿なれば、次第まさりにますらん事さこそ候はめ。此十重の佛身を他受用身と名く。其國土は皆淨土なり。其淨土の廣さは、蓮座の如く次第に廣くなれり。去れば初地より第十地に至るまで、十重の淨土あり。極樂は則ち阿彌陀佛の初地の菩薩の爲に顯れます時の國土と見え候。

是の如きの諸法の性は眞如なり。如來の自受用身の中に備へ給へる無漏の智慧は、能く眞如に冥合せり。此眞如法界を法身と名く。此法身・報身・化身を、佛の三身とは申也。

化身をば應身とも名く。他受用身をば報身に收む。淨土の中に至り極れる淨土は、自受用の淨土なり。猶ほ其性を申さば法身の土なり。毘盧舍那とは此法身なり。盧舍那とは此報身なり。釋迦牟尼佛は是化身なり。（異本云、法身とは毘盧舍那なり、報身は淨土の彌陀なり。又盧舍那とは釋尊の華嚴等の最上の法を說きたまふ時を云ふ。諸經を說きたまふは應化身の釋迦佛なり。三身三佛及諸佛、卽一心法界一切唯識なり）

五位の修行の樣、をろ〳〵かやうに候也。抑も三大僧祇の修行の久きは、あぢきなく候へとも、大覺の前には之を一刹那に收む。三大阿僧祇定めて久しと思ふは、是れ無明長夜の未だあけざる程に、堅執の夢さめざる間也。此迷一度さめぬれば、三祇卽一念也。一念卽三祇也。などかは修せざらん。又などかは至らざらんや。此事ども誤まりもや候らん。

「愚なる文に候へども、數度御心に入れて讀みたまひ」、又「文を離れて能く心に觀じたまふべし。唯識は殊に觀心が大切にて、學解ありとも觀心深からざれば唯識に非ず。是等」詞も「不敬に」拙く候へども。「御見取り安きを存じ候。此度大恩悲母の重き」仰に隨て、形の如く記し申上奉り候。「猶ほ細々は、來月中旬恩顏を拜し候節に申上るまゝ」、經論の文も宗家の釋など

も皆略して候也。

法相二卷鈔 終

沙門　行慧

（古寫本奥書）

觀佛三昧經に、佛の御父淨飯大王、出離の要法を尋ねたまひしに、佛、萬行の中に念佛を勸めたまふ。父王曰く、神通妙用第一義諦、何ぞ我に敎へざるや。佛曰く、是は凡夫の及ぶ所に非ずと。寶積經には、御父の大王及び七萬の釋氏の御一門、皆念佛を勸めて往生を遂げさせたまふ　以來親在せば敎へ導き、死すれば回向す　諸師皆然り　根來の覺鍛尊者は、密宗の大導師なれども、母堂の爲に孝養集三卷を撰びて念佛を勸む。吾が大恩の尊師良遍阿闍梨も御老母の爲に唯識の大意を述べたまふ。此書は大乘法相宗入門の楷梯、唯識觀行後進の所依也。誰か亦た信敎せざるべけんや。爰に於て頂戴して拜寫し奉る。

仁治三年壬寅三月二十四日　　弟子隨從沙彌緣圓記

弘安六年癸未八月七日　　順松房緣憲拜寫

元亨二年壬戌二月十六日より　　良春房順專拜寫

文和元年壬辰九月十二日　　緣春房經實拜寫

弘和二年壬戌正月六日　　傑堂能勝二十八歳拜寫

文化三年丙寅六月二十三四兩日駿河臺の假宅に於て

十五歳橘原主水正命謹て拜寫し奉る者也

昭和六年夏六月初一日拜讀加朱了。寺庫古鈔本及二三異本

對校了。　於別府湯治中　　鵤寺定胤和南

昭和七年八月二十日印刷
昭和七年八月二十七日發行

東京府北豐島郡高田町成蹊高等女學校內
編輯兼發行者　奥田正造

不許複製

東京市本郷區春木町二丁目廿一番地
印刷者　森江英二

東京　本郷　杏林舍印刷

發賣所　東京市本郷區春木町二丁目
電話小石川四一八二番
振替東京八二一九番
森江書店

終